風雅のまこととたはむれ

土田龍太郎

かの俳聖芭蕉庵桃青、その一期の風雅を尋ぬるに、これ笈の小文の序に記せるごとく、造化に順ひて四時を友とするにほかなかるべし。この造化隨順のおもむき、土芳のものせる赤册子あかざうしを見て、ややつまびらかに知らるることわれすでに述べたり。これに次ぐものとは嵐雪の編める或時集の序ありて、またなほざりに見過すまじければ、今そを左に掲げみるべし。

花に對して信まことなくんば花うらみあり。句は是にならふべし。花に問へば花かたることあり。姿はそれにしたがふべし、と或時教ゆ。

ここに蕉翁の名こそ見えね、これかつて師の説きしままを嵐雪のさながら記せるにほぼまぎれなし。この序にこめられし桃青翁の風雅論の深く幽かそけきことたぐひなければ、世のおぼろけの物識り人のおのがさかしらもてえ明らむべききはならざるはさることなれども、この序ただ一たび見るからにわが心に浮びくるよしなしごとのあれこれ、云はでやみなむはあいなければ、せめて片はしばらくだにすずろに述べまほしくぞおぼゆるなる。

まづ花に問へば花かたることありといへるはいかなる意こころならむ。花に問ふこといかにねもころなるとも、花に聲ありて人の言のはもてたちどころに答ふるためのさらにあるまじきはいふもさらなり。

ここに花といへるは花のみにしもかぎらで乾坤造化の万象をさせるにほかなし。變りてやまぬ造化に向ひつつその刹那の相をわが發句もてたちまち見とめ聞とむるをえば、造化のさながらわが問ひに答ふるやにおぼゆることなきにあらず。時にとりての造化の實相を問髪を入れずきと捉へて放たぬわづかの内におのづと出でくる吟詠、これすなはち造化への問ひにしてしかも造化の應へなれば、花に問へば花應ふることありといふとも、その問ひと應へと兩つあひ隔たれるにてもあらず、問ひすなはち應へなりと思はむもはばかりあらじかし。俳諧者の造化に向ふままに造化の顯す實相を發句もて捉ふるくすしきわづを花に問へば花こたふることありと云へるにいたり。

乾坤といひ造化といふもの命なき機關かんばんのたぐひにはゆめ擬なぞらへがたし。魂の宿れること人に異らずとせば、なべての機關調度をあやつる匠のわざばかりにてはいかにもことたらはず、ただもてあつかひてやみなむほかせんなかるべし。

おほかた命あるものとは、いかにわれになづみたりとも必ずわが望むままにはあへし
らふべからず。日頃はひたぶるに我を慕へるにまかせていと睦ましくなれる女をみなのいかにし
たりけむゆくりなくわれにつれなくなりて、語りかくともただよそめがちにてをさをさい
らへだにせずなるぬることなきにしもあらず。いかなればかくうちつけにすぎなくなれる
やらむゆゑよしつゆ思ひよらねばすずろにあやしきままにていかむともせむすべ知らにた
だ鼻白みてやみなむほかなきぞあぢきなき。

そも乾坤造化とは機關からくりのたぐひにはあらず、人にて命そなはれりとせば、もとより不
可知不可測にて、その自性より見ばあだなる女をみなとさしも別ちなかるべし。

咲く花とてもまた乾坤の萬象のほかにあらねば、命あるものにてあらかじめ測りがた
く、かく對むかはば必ずかく應ふるものぞとはさらに定めがたし。

いかにまめだちて花にも云ひかくとも、その花のあたかも浮きたる女のごとくにて、
ほとほといらへだにせでやみなむことなきにあらず。あるはまたこれにかはりて、花に向
ひてまほには問ふこともなく、ただざればみたはむれついでみかくるばかりにてやみぬ
るに、いかなるゆゑにや、花の心たちまちとけたるがごとくになりて、日頃はなほはぢ隠
せるおのが姿を露はせるやにおぼゆることはたなきにしもあらぬぞいともあやしき。され
ばわれ花に問へば花必ず應ふべしとは定めがたく、よしや應へありともわがあらかじめ思
ひまうけしままなりともゆめたのみがたし。花に問かくるにまかせて花やがて應ふること
まさしく嵐雪序の師説に云へるがごとくなりやいなや、いまだおぼつかなきふしなきにあ
らず。

さらに同じ序のはじめに、花に對して信まことなくんば花うらみあり。句は是にならふべしと
云へる師説の旨趣とみにはしかと捉へがたし。花に向ふわれにまことなくば花もまたおの
がまことをすぐに顯さでねぢけ恨みたるさまに見ゆらめば、かの花のまことをえ捉へぬま
まに發句をものさむともただ拙くてやみなむほかなしてふ意こころのこもりたるにてもやあら
む。

さはれよしやわれにまことなきを花うらみたりとも、これまた花のうらみつつもわが問
ひに應へたるにてはあらずや。うらむるもまた應へにほかならず。さればわれにまことあ
りやなしやはともかくもあれ、われ花に向へば花われに應ふることたえてなきにしもあら
ざるなり。げにかかることわりもて蕉翁の花に問へば花かたることありと説きたるにても
あるべし。

この師説にてまことといへるはそもいかなるさかひをさせるやらむ、くりかへし思ひ考へではあるべからず。造化の内のよろづの事物に對ふにつゆたはむることなくただすくよかにまめだちてまほに問ひかくるのみがまことなるにてはあらじ。あざれたはむれかくることまことなきやに見ゆともこれあながちに云ひ貶むべからず。

造化に對ひ發句もてその實相を顯現せしむるが俳諧者のいさをなれど、かかる顯現まさに造化とたはむれてはじめて成就することのなきにあらぬはずであら述べりしがごとし。さればまことといふも一とほりならず。ひたぶるにまめだちて造化に對ふまことあり、いどみたはむれて顯はるるまことはたなきにあらず。かれとこれとうらうへのごとくなれども、いづれ實相顯現のよすがたるにまぎれなければ、あひ背きあひ容れざるものはさらに思ひ定むべからず。根ざすところ一つにて、いづれも花に問へば花かたることありてふ師説の意にかなはずやはあらむ。

吟詠のたはむれ、その發句の言葉の表はたはむれとは聞えず、かへりて物事にまほにまめやかに對へるがごとくに見ゆることなきにあらず。風雅のまこととたはむれのあはひいともはつかにくすしければとみには見究めがたくして曰く言ひ難きところあり。右にはただかたはしばかり述べてやみなむほかなかりけるぞいともほいなき。

萬葉集に見ゆる大伴家持とある尼の贈答に始まれるなる本朝俳諧の遷り變り、そのさいともことしげければここにまねばむもえうなきにいたり。

俳諧の二文字、滑稽諧謔を原義とせるは弘く知られぬれど、この滑稽諧謔といふもその品貴き賤しきくさぐさあり。ただ當座の笑ひをもよほすばかりのいふかひなきざれごとさへ少からねば、なべての俳諧さながら風雅の奥旨にかなへりとはいかにも云ひがたし。さはれまた造化にいどみたはむれてはじめてその實相を顯現せしむるが俳諧の道のつひのほかにほかなしとせば、造化に對ひてふとゆくりなく出でくるたはむれゆめなほざりに思ふべからず。

(令和六年十一月二十七日受附)